



新製品

学校、家庭、地域、算数、自然など
身の回りの単語と表現2,000以上

絵で見る英語の素材集

ミニントス

第8号

2009年2月13日(金)

発行所

ミント音声教育研究所

〒370-0013 群馬県
高崎市萩原町 950-31
Tel/Fax 027-353-1091

紙面案内

記事	連載	特集
絵で見る英語の素材集 まもなく公開	電子教材の諸要件 / 教育現場の三項関係【教師・生徒・課題】	通年テーマと言う新しい発想のすすめ(その2)
一面	二面	二面

ユーザーサポート
027-353-1091

m-Boxed やプレーヤーミント
利用方法のお尋ねや教材
のお問い合わせは電話で受け
付けています

コミュニケーション活動向け 音声付絵カードとシート

まもなく公開

小学校英語

「絵で見る英語の素材集」がまもなく公開される。これは、身の回りの日常的表現を、使用するようにしようという文科省小学校「英語ノート」に対応した電子教材として開発してきた。小学校担任がALT任せでなく授業が運営できるようにとの配慮と工夫が満ちている。

授業運営を支援する 音声重視教材

「絵で見る英語の素材集」では、まず音から入る。日本人担任がここで音を聞かせようと思つたとき、ボタンひとつでボンと音が出る。そのタイミングが生徒の元気な発話を引き出す。英語の音声に満ちた授業運営ができる。

ALTが授業上手とは限らない。普段から子どもたちと接し、専門教育を受けてきた日本人担任

内容は単語編と対話表現編に別れている。単語は千二百以上。スキットの場面は学校、家庭、地域、社会、自然、算数など多岐に渡り、表現文例は九百以上。大半の指導計画に適合している。

次期エムボックス キッズ9に搭載

この素材集は、エムボックスの新機種「キッズ9」に搭載され3月から販売予定。

トピックス

エムボックスが 県知事から表彰

ミント音声教育研究所が開発した「エムボックス」が群馬県知事から表彰され、昨年十二月十九日に県庁で授与式が行われた。

この賞は独自の技術開発やビジネスモデルの展開で優秀な取り組みに贈られるもので、県内では他に七社が受賞。式典の後、田淵代表が製品の紹介を行った(写真左)。

今年の研究テーマは 音声重視の識字教育

日本の英語界には、「文字の導入が英語嫌いを増やす」という迷信があるようだ。

しかし、民間で「聞く」「話す」だけのところは少ない。「読む」「書く」を加えた四技能のバランスを取らないと生徒は集まらない。

ではなぜ文科省は「文字」を嫌うのか？

確かに、クラス編成や生徒数、授業時間数や公共性など考慮すべきことはある。しかし、「音声」「文字」「意味」は言語に欠かせない三要素だ。

課題は教材と教授法

そこで、小学校英語での文字のなめらかな導入(識字教育)を今年の研究テーマとした。キーワードは

音声重視

音声あつての言葉

義音字一体

字はいつも音や意味といっしょ

【教育現場の3項関係】 【教師・生徒・課題】

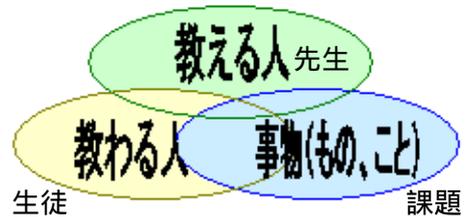
電子教材の諸要件 その5

連載

「教育って何だろう？」と考える時、大切なのは人の要素。教える人と教わる人のこと。そしてこの二種類の人が一ヶ所に集った

目的。それが課題。この三項関係つまり、「教える人」「教師」「教わる人」「生徒」「事物」「課題」の三者の関係をどう捉えるか？

そして電子授業はこの三項関係の中でどう言う位置を占めるのか？これが今回の主題。eラーニングと言うのがある。これは人がコンピュータに向かって操作しながら学習を進めていく仕組みになっている。つまり「個別学習」だ。同じ電子授業でも、電子一斉授業とeラーニングは異質だ。何が



【教育現場の3項関係】

前回お薦めしたマザーグースは、欧米の音の文化遺産とも言うべき童謡でしたが、今回ご紹介するのは、英語の音そのものの特質を利用した識字教育としてのフォニックスです。フォニックスと言うと日本では、母音や子音のアルファベットの読み方を習って、単語や文が読み書きできるようにする方法として、広く知られています。しかし、すでに英語がしゃべれる子どもや移民が習うフォニックスをそのまま持ち込んだのでは、日本では通用しません。なぜなら、音が

まだ入っていないからです。

音の入っていない子どもにフォニックスを教えて失敗した例をよく聞きます。「読めるよ」と言っ

通年テーマという

あたらしい発想のすすめ

その2 フォニックススライム (1)

て喜んでいられる子どもの発音が、ローマ字読みやカタカナ英語だったりします。これでは、せつかく身につけた音も通じません。

の区別でも、音の入っていない日本の児童には混乱の種でしかないのです。そして熱心な先生ほど凝りすぎて逆に「英語嫌い」を増や

してしまつたのです。

音声教材としてのフォニックススライム

ミント音声教育研究所が開発したフォニックススライムは、音の入っていない日本の児童にあわせて、まずはしっかりと音から入りながら、音から文字へと自然に進むように工夫された識字教育用音声教材なのです。ですから、数回のレッスンで終わるのではなく、毎回数分ずつ年間を通して実施することで、英語のリズム、発音と文字が習得できるので

どう違うのか？
人を見て話すと言う情報の重み付け、人と人との交流と言う全人教育の観点から見ていく。

1 人を見て話せと言う情報の重み付け

教育や学習での要点は、タイミング(時機)である。早すぎれば芽を摘み、遅ければ後の祭り。時機を得ればスクスクと伸びていく。この時機を見極めるのが教える人(先生)の役割となる。

電子教材を使って単語や表現をフラッシュカードさせるとき、何回繰り返すか、今のところをもう一度提示するか、次に進むか、同じところを提示法や演習法を変えて繰り返すか、それとも次の課題に進むか。こうした舵取りこそ日本人担任教師の巧みの技である。

- < 教師がボタンを押す
- < 絵や音が出る
- < 生徒が習得する

現象はこの順だが、生徒が受け取るのは単に「電子の音や絵」ではない。「教師の頭の中で重み付けされた音や意味」なのだ。つまり

- < 頭の中で重み付け
- < 教師がボタンを押す
- < 絵や音が出る
- < 生徒が習得する

CDやDVDで授業がうまく行かないのは、「教師の頭の中の重み付け」を失った情報の垂れ流しとなつてしまつからだ。

2 人と人との交流 コミュニケーション

学んでいる言葉や表現が自分や相手にどう関わるのか、一斉授業での活動はそれを学ぶ場ともなっている。電子教材は仮想現実としてそれを支援するだけであつて、取って代わるものではない。